

「工芸継承」 日高真吾（国立民族学博物館准教授）

（1）商工省工芸指導所 2018 年 9 月 8 日刊行

商工省工芸指導所は、日本における工芸の近代化、産業化の推進と東北地方の工芸業界の発展を推進することを目的に、日本で初めての国立の研究・指導機関として、1928（昭和 3）年に仙台市に設立された。その後、39 年には大阪に関西支所が開設されている。世界的な建築家であるブルーノ・タウトやシャルロット・ペリアンを招へいしたり、日本のインダストリアル（工業）デザインの礎を築いた剣持勇、豊口克平らを輩出したりするなど、69 年の改組でなくなるまで日本の工芸界、デザイン界をリードする役割を担ってきた。

国立民族学博物館では、この工芸指導所の活動を概観し、日本のインダストリアルデザインの原点と現在を考えることを趣旨として、今月 13 日から 11 月 27 日にかけて特別展「工芸継承—東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」を開催する。工芸指導所がより良いデザインや機能性を追求して制作した多くの試作品を展示する。また、現代の産業技術にも大きな影響を与えている、さまざまな技術も紹介する。

工芸とインダストリアルデザイン。一見、あまり関係がないように思われがちな両者が、日本では密接にかかわりながら発展してきた様子をみていただきたい。



豊口克平がデザインしたスポークチェア＝国立民族学博物館所蔵

(2) 玉虫塗 2018 年 9 月 15 日刊行

商工省工芸指導所の試作品のなかに玉虫塗のパフ入れが残されている。漆塗りなのだが、一般的な漆器とは異なり、光の当たり具合で微妙に色味が変化してみえる。この色調の変化が、タマムシの羽に似ていることから、玉虫塗と名づけられた。

この玉虫塗は、工芸指導所で輸出用に開発された技法で 1933（昭和 8）年に特許を取得している。海外で好まれる漆器を目指して、色味やデザイン、質感の観点から、徹底的に試行錯誤がおこなわれて開発された技法である。基底材のうえに銀粉をまき、染料を加えた透明な漆を塗り上げることで、従来の漆器にはなかった仕上がりとなる。玉虫塗は、39（昭和 14）年に特許実施権を得た東北工芸製作所（仙台市）に伝えられ、85（昭和 60）年に宮城県の伝統的工芸品の指定を受けた。

工芸指導所は、玉虫塗をはじめ、輸出用の産業工芸品の開発に積極的に関わり、その情報を「工芸ニュース」という機関誌で次々に紹介している。また、輸出向けの工芸品展を毎年開催し、民間企業と連携しながら、新しく開発した技術の普及を図った。

世界に通用する工芸品を目指して、技術開発とデザイン研究を推進した工芸指導所の活動が、この小さな玉虫塗パフ入れからも見て取れるのである。



玉虫塗パフ入れ。光の当たり方の加減で微妙に変化する色味が美しい＝東北歴史博物館所蔵

(3) 非円形ろくろ 2018 年 9 月 22 日刊行

こけしや椀は、ろくろで木材を円形に削りだしてつくられる。ろくろを用いた木製のサラダボウルは欧米では人気が高く、商工省工芸指導所は、形状に工夫を凝らしたデザインのサラダボウルをつくるために、非円形ろくろの開発に着手した。

二つの回転軸を備え、木地が 1 回転する間に刃が複数回当たるよう工夫された非円形ろくろは、三角形や楕円、四角形に削りだすことができ、1952（昭和 27）年に特許を取得している。

非円形ろくろは、昭和 30 年代に約 10 年をかけて、装置の機能改善や安全対策の改良を加えながら、多くの試作品がつくられ、製品として一般販売された。生産効率の悪さから、次第に非円形ろくろは廃棄処分され、現在、その姿を見ることはできない。しかし、数年単位で新規事業を完成させる工芸指導所において、このように長期にわたる開発がおこなわれた非円形ろくろの事業は、とても珍しい事例なのである。

プラスチックなど成形のしやすい材料が開発された現代においては、工芸指導所が考えた多角形のデザインのサラダボウルは簡単につくることができる。しかし、当時の工芸指導所では、この非円形ろくろや、それで作られるサラダボウルに対して、産業としての可能性を強く見いだしていたことがうかがえる。



非円形ろくろで制作されたサラダボウルの試作品。円形にならないように、ろくろで削りだされた労作である＝東北歴史博物館所蔵

(4) 成形合板 2018 年 9 月 29 日刊行

2016 年のリオデジャネイロ五輪では、日本代表の卓球チームの活躍が大変な話題となった。同時に、X の形状の脚部に木材が用いられた躍動感あふれるデザインの卓球台「インフィニティー」が大きな注目を集めた。製作したのは千葉県の卓球台メーカー「三英」で、16 年度のグッドデザイン賞を受賞している。デザインは、ソニーでウォークマンなどを手がけた澄川伸一氏。そして脚部の製作には、山形県の家具メーカー「天童木工」が加わった。この脚部に用いられているのが、商工省工芸指導所が開発した成形合板技術なのである。

成形合板技術は、戦時中、木製飛行機開発のために研究が進められた。木目の縦目と横目を交互に貼りあわせることで、木の膨張収縮が安定し、天然木以上の強度を持つ合板を生み出した。

なお、「インフィニティー」は、東日本大震災の被災地への思いや復興への願いを込めて、岩手県宮古市のブナ材が用いられた。また、ブラジルのイメージカラーも取り入れつつ、「新しい生命」という東北へのメッセージを込めた色「レジュブルー（青い瞳）」が開発され、天板の色として採用されている。

世界が認めたメード・イン・ジャパンの卓球台。ここにも工芸指導所の足跡を感じることができる。



2016 年度グッドデザイン賞を受賞した卓球台「インフィニティー」＝三英提供